

街角

日野笙子

\* 登場人物

かみむらさとし

上村聰 (43歳) 「街角オフィス」

のメンバーの男性。東北震災関連の移住者。

しまだゆいこ

島田惟子 (41歳) 「街角オフィス」に訪

れてきた音楽愛好家の女性。1995年、神戸の震災を体験。

教会のミーティングの人たち数人

〈回想中〉

聰の妻(故人)

惟子の夫(故人)

〈参考〉

東名先生(44歳) とうめい先生と呼ばれる、NPO法人「街角オフィス」の代表。実名はひがしな、と言う。

\* あらすじ

へ

時は現代、夏祭りを一月後に控えた初夏。北国の都市、札幌を舞台に、二つの大震災で心に深い傷を負った二人の男女の出会いと、彼らの心の救済までの物語です。とあるビルの一角に支援団体「街角オフィス」、物語はその代表が不在であったことから始まります。男は心ここにあらずという感じで悲嘆をあらわにし、一方、女はもうじき死ななくてはならない気がしてくる、と。二人は互いにつらい過去を抱え、やみがたい思いを知ります。物語はギターと花火にまつわるエピソードを軸に展開します。被災という苦境が彼らの心を傷つけていただけではないのです。彼らを苛んでいたのは、罪障感であり、失ってから気づいた愛でした。苦しみが去って訪れるもの、それは悲しみ、二人はその新たな現実を引き受け生きようと模索します。そして祭りの夜、ちやうど今、夜空に諸手(もろて)を広げ花火が上がったのです。

SE 夏の夜、遠くの方で花火が上がる。  
offで連続して花火の炸裂する音。

聴「当時僕は女房と十年暮らした」  
惟子「えっ？」

SE ビルの看板は「街角オフィス」。ビルの一階から出る二人の気配。

(間)

聴「僕は、本当は、女房が無性に好きだった。なのに、酔うと、なぜだか殴ってしまった」

N「街角オフィス、と名付けられたそのビルの一室から出た二人の男女は、どうやらある心の問題を抱えて訪ねてきたらしい。二人は偶然そこで出会ったのだ。そして男は呟いた。心ここにあらずという感じで、見ず知らずの女に向かって、呟いたのだ」

SE 二人が歩く音。続いて夏の夜の喧噪。

聴「女房は元氣そうにふるまっていた……ほんとは弱かったんだ」

惟子「えっ」

聴「女房はぞっとするほど……弱かった。あいつは寂しかったんだ」

惟子「まあ」

聴「酒を飲む僕を見て、ふっと笑うんだ。僕は女房が……なのに僕は」

惟子「えっ、……私、このスタッフじゃないんです」

聴「ん？」

惟子「……私、ちがうですよ」

聴「ああ、すみません。なんか、ぼーっとしちゃたな」

惟子「せっかくこうして来たのに、肝心のスタッフがいらっしゃらないのがおかしいわよ。避難民の生活支援なんて、名ばかりじゃない(苦笑して)」

聴M「あつ、女房が隣にいたような気分になった。この人の姿と重なってしまったんだ」

SE (聴、回想、震災前) 戸建ての家、2階に上がる気配。妻が窓の外を見ている。港の花火の音。

聴「ちよつと、荷物取りに寄っただけだ」。

聴の妻「うっ」

聴「(妻の傍らに置かれた椅子を一瞬見て、間) じゃあな」

聴の妻「もう行くの？」

聴M「それが妻の最後の言葉だった」

音楽 FI

タイトル「街角」

音楽 FO

SE 二人が連れだって歩く靴音。

惟子「どうめい先生、って言ったわね、あの……先生？」

聴「彼、東名と書いて、ひがしな、と言うんです。みんな、どうめい、どうめい、って呼んでますが」

惟子「(笑い) そう。話、遮っちゃってごめんなさい。やっぱり、どうめい先生にお話した方がいいです」

聴「ああ、すみません」

惟子「何かのご縁だと思うけど、やっぱり」

SE 夜の街の喧騒。続いて商店街のアナウンスが入り、来月の夏祭りの紹介。花火の音offで。

惟子「私ここから、地下鉄に入ります」

聴「あつ、僕も地下鉄です」

SE 二人の移動する靴音

惟子「ああ、この音、花火の音って、お祭りだかなんだか知らないけど、死刑執行のカウントダウンみたいで、もうじき、死なな

きやならないみたい……」

聰「花火……か、いい時もあつたんだが」

惟子「……えっ？」

聰「来月、あのオフィスでも何かやるみたいですよ。夏祭りに」

惟子「そう、(考えるように間) やっぱ私も避難民よね、一種、心の避難民かな(苦笑)」

聰「よかつたら、少し話しませんか？。そう  
だ、地下街に、静かな喫茶店があるんです。  
僕時々入るんです。飲みたかつたら水割り  
くらいありますよ。僕はきつぱり禁酒しま  
したが(笑い) 僕、こういうもんです。(ネ  
ームカードを手渡す)」

惟子「上村聡(かみむらさとし)さん」

聰「ええ」

惟子「私、島田惟子(しまだゆいこ)です」

SE 地下街に二人が降りる音。喫茶店

のドアベル(カランカラン)の音。

パロックのギター曲が流れる。

運ばれてきたコーヒーを飲む音。

惟子「私の夫、けっこう年離れてたの。北海

道の港町が出身。私は神戸よ」

聰「ああ……神戸」

惟子「(男が言い終わらないうちに)それで、  
私もうじきその年齢になるの。夫の亡くな  
った年齢よ。だから、なんか、このお祭り  
の時期になると、私もう死ななきやならな

い、そんな気分になって、あと一ヶ月よ。  
夫が亡くなった年についてになるの。夫の育  
つた街は古くから港祭りがあつたらしい  
の。だからあの人、花火を見るの好きだっ  
た。父親のような人だったわ」

聰「すみません」

惟子「謝つてばかりね」

聰「僕、どう言つたらいいのでしょうか？」

惟子「訊きたい？」

聰「うーん、だつて、あんまり応えたくない  
んでしよう？」

惟子「うまく説明がつかないのね。何年経つ  
ても」

聰「うん、そうですね。人に言つていいつ  
てもんじゃない。だから街角オフィスも必  
要なのかな」

惟子「東名先生とは？」

聰「大学のときの友人」

惟子「そう、東明先生って私好きよ。へんな  
意味じゃないわ。私、初めてあのオフィス  
に行つた日、そうね、あの時はただ札幌の  
ことわからないし、移住者対象に何でも相  
談して下さい、協力できる情報は教えます  
って、そうしたら、なんか、あの先生、妙  
にだるそうな感じじゃない？ それでい  
てなんか妙にふっきれたような、どう言っ  
たらいいのかしら？」

聰「うん」

惟子「たいてい、パニックで大変な目に遭つ  
てる人にはこう言うのよ。専門家はね。ほ

ら、心的、外傷後ストレス障害、って言葉、  
だいぶ前から言われてきたけど。うーん、  
なんて言つたつけ、PTA……？」

聰「PTSD？」

惟子「そう、それよ、その専門家は普通はこ  
う言うのよ」

聰「うん」

惟子「長い人生、これからです。きつとあな  
たのこれからはいい人生になりますつて  
ね。そりや、くさされるより、人間、優し  
くされた方が絶対いいに決まつてる。私、  
長い人生、長い人生つて、繰り返し言い聞  
かせたもんよ。一日が終わると、ほつとし  
たものよ。パニックのさなかつて、一日の  
無事が奇跡なのよ。だいぶ前のことよ。あ  
ら、こんなこと言うなんて私の人生長い  
ね」

聰「うん、ベテランなんだね。何かと」

惟子「それでね、東名先生の場合、こう言っ  
たの。短い人生、くよくよしなさんな、つ  
て」

聰「うん、短い人生つか」

惟子「口癖がね、おかしいのよ。たいしたこ  
とじゃないのに、私、灯油つて注文するつ  
てわからなかつたの。それがわかつた、と  
言つたら、そりや、君、その発見は偉大な  
ことだよ、つてね。偉大、偉大、つて子ど  
もじゃあるまいし、もうひとつの口癖は、  
素晴らしい、を連発するの。その生活の発  
見は君、素晴らしいよ、つてね」

SE 二人は笑う。運ばれてきたコーヒーを飲む音。

聰「(笑いながら) そうだ、東名(どうめい)、昔っから、そうだった。」

惟子「あら嫌だ、私、おしゃべりしちやっただけだ。」

聰「うん、いいんです」

惟子「なんかへんよね。もうじき死ななきやならないって、へんなこと言っちゃったり」

聰「へんじゃないです。人の心なんて矛盾だらけでしょう。矛盾だらけで、たやすく嘘をつく。自覚がないだけだ。だから、そのまま口にしたら、誰だって混沌としてると僕思うな。あなたは正直だ」

惟子「そうかしら」

聰「そう、君は素晴らしい、それは君、偉大な発見だよ(東名先生の真似をしながら)」

惟子「(笑い声を立てる)」

男「さっきの花火の音、隣の川沿いですよ。」

来月はもっと大きい。小高い丘に昇ったらとても良く見えますよ。二階の家の窓からでも……(急に声が小さく弱くなる)」

惟子「そうなの」

聰「ぼくもね、実を言うと夏は、つらいなあ。」

仙台の港町で、見たことありますよ。丘の家の窓から港が一望できて、花火が見えた」

惟子「東北の方？」

聰「一度住んだことあります。ぼくも花火の音、一人で聞いたら、ちょっと困るかな」

惟子「わかったわ。そんな感じだった」

聰「うん？」

惟子「こだわりがあるから、ひっかかるんでしょう。心にはない思いは素通りしていくもの。私なんかひねくれてるから、無関心になる。自分の心にあるから、それがわかるの。あら、いやだ、私また余計なこと言っちゃった(笑う)」

聰「うん。あなたの言うとおりだ。僕、一人で花火を見たり、楽しむつてのは……」

惟子「そう。ところで、あなたはあそこで、何か作る方？ それとも、あつ、いけない、あなたはきつと先生なのよ」

SE 聰がクスツと笑い、コーヒーカップをソーサーに戻す。

聰「僕、先生じゃないです。やっぱりクライエントですよ。移住してきた避難民。物作りは嫌いじゃない」

惟子「そう、なんか、嫌なこと思い出させちゃったみたい」

聰「いや、僕、こんな日は、一人で居たくなかったんです。知らない人に気安く、こちらこそ、すみません」

惟子「私、さっきはびっくりしたわ。あの部屋に行ったら東名先生のメモ紙があるじゃない？ で、何て書いてあったと思う？」

あつ、あなたも見たわよね」

聰「急用でワークシヨップはお休みします。これを機会に、仲間同志で分かち合い下さい」

惟子「いくら民間の支援団体だって、ちょっと無責任よね。どんな生活相談もそりや自由だったけど(書類を開きながら)。でも、いったい何考えてるんでしょう？ どうめいせんせい、姿をくまらず、か」

SE コーヒーカップとソーサーの音。

聰の手が微かに震えている。

惟子「大丈夫ですか？」

聰「ええ、まだ時々、こんなふうには離脱症状みたいのが出てくる。ただ、僕、物作る仕事だったから、それで手が震えて、できなくなつた。まだリハビリ中。気にしないで下さい。幻覚とか僕はありません。(笑い)」

惟子「そういうことじゃないのよ」

聰「いいえ、ありがとうございます。あなたは札幌の方ではないんでしょう。神戸でした？ あなたでしよう？ ギターか何か音楽をみんな始めたのと提案したのは」

惟子「あそこで音楽の好きな人が集まって何かするのでもいいかなって、でも私は全然下手なのよ。18年前に一度習い始めて、それっきりだった」

聰「うん、またはじめたらいい」

惟子「上達したら夫に聞かせる約束だったの。」

私、もう18年前から避難民。正確に言う  
と、生活の再建という段階じゃ、もうない  
のよ。私、親兄弟いるわけじゃないし、う  
ーん、なんか説明が面倒だわ。心に前科有  
るの。聞きたくもないと思うけど(苦笑)」

聴「聞きたいな」

惟子「存じのように神戸の再建は早かった。  
私が今ここに居るのは、避難というもんじ  
ゃないし、直接移住したわけじゃない。人  
生にそういうことが度々重なった、こう言  
った方がベターね。最近なんです。札幌に  
来たのは、この前は別の街にいたわ」

聴「うん、そうだったんだ」

惟子「あの頃は何が起こったのか、しばらく  
わからなかった。パニックってそういうも  
んよ。それで……ある日、なんにもしたく  
ないの。ほんと、なんにもよ(少し涙声)」  
聴「ああ、思い出さなくていいこと、思い出  
させてしまった」

惟子「もうずいぶん時間が経ってるのに……」

聴「うん」

惟子「私ばかり喋ってるみたいよ。訊いてい  
いかしら？」

聴「ええ」

惟子「あなたは奥さん亡くされたのね」

聴「ええ。二年以上経った」

惟子「そう」

聴「僕、まだよくまとまらないんです。とに  
かく僕が悪かった。女房が生きていた頃、  
なんにもしてやれなかった。人に死なれる

くらい、空しいもん、ないです」

惟子「まだ日が浅いわ……」

聴「うん」

惟子「死んでからじゃ、間に合わない」

聴「うん」

惟子「東名先生の口癖まで知ってるのね。私  
は札幌へ来て先生のセミナー受けたわ。心  
理学の。なんかうさんくさそうで(笑い)  
でも時間を忘れた。忘れてたような懐かし  
さみたいな、学生に戻ったみたいだった。  
私これまでいろんな人に助けられたわ。だ  
からもう十分ってところあるの。でもいざ  
カウントダウンが始まると、やっぱり怖  
い」

聴「そりや、怖いですよ」

惟子「もつと生きたい人だっているのに……」

聴「そういうこと、普通は感じないと僕思う  
な。そのくらい大変だったんでしょ？」

惟子「誰も知らないのよね。死ぬってどうい  
うことか」

聴「うん」

惟子「……北海道は自然がとていいわ。広  
くって、北の国って感じ。ヨーロッパみた  
いよ。そりや、思い出と共に生きるのもい  
いけど、私もうひとりぼっちよ。どこへ行  
っても心細かった。新しい土地で何か希望  
みたいなもの見つけて生きる方を選んだ。  
あの頃はまだ若かったのよ。もう一度同じ  
ことをくぐるかって? 絶対無理よ。精  
魂使い果たしたわ(鼻声になる)あら、嫌だ。

もうこんな時間、そろそろ帰らなくちゃ」

聴「あの？」

惟子「えっ？」

聴「一月経っても、死なないでください」

惟子「まあ、嫌だ、冗談よ。私これでけっこ  
う人生楽しんだわ。頭丸めてもいいくらい。  
(自嘲気味に笑って)心の出家が目標よ」

聴「うん……そうなんだ。いや、だから、ち  
よつと気になるのかな(少し笑う)」

惟子「……私、このお店好きよ。バロックが  
流れていて」

聴「うん、ギターの曲が多いんです。バロッ  
クに限らず、ギターの音色っていいです  
ね」

惟子「バロックに神は感じないわ」

聴「うん？」

惟子「でも、安心するのよ。逆に心に触れて  
こなくって。周りの声、何もかもシャット  
アウトしたい時があったわ。そんなとき、  
バロックのギター曲だったら、いつまでも  
聞いていられたわ。そうやって朝が来るま  
での時間、繰り返し、聴いて過ごしたもの  
よ。もうだいたい前のことだけだよ」

聴「僕、教会にも通ってるんです」

惟子「やっぱり、クリスチャンなのね。なん  
か厳かで、静ひつ、って感じよ(笑いが重  
なる)私、今、懺悔してる気分よ」

聴「(笑いながら)それは偉大なことです。  
僕はただ、アルコールをやめるために通っ  
てるだけです(二人の笑いが重なる)牧



師にも僧侶にもなれるわけない」

音楽 喫茶室のギター曲 F O

S E 二人が店を出る様子。

喫茶店のドアベル（カランカラン）

N 「街角で出会った二人は互いにつらい過去を抱えていることを知った。そしてビル街から抜けて地下街のこの店のドアを開けた。もう何年にもわたって、この都会の店のドアは彼らのような人々を目撃してきたのだ。ドアからドアへとすれ違うように慰めようのない、人の苦しみやら悲しみやらを。ドアベルはカランカランとその度音を立て続けた。ドアからドアへと何かをバトンのように引き渡すために」

S E 地下鉄のホームの喧噪。二人は別方向の車両に別れて乗る。

一人になった惟子、フラッシュバック。

車両の中で涙をポロポロ流し出す。その声は次第に大きくなりついに人目もはばからないような嗚咽に変わる。  
堰を切ったように泣き出す。惟子の悲嘆する様子。

N 「1995年、1月17日、阪神淡路大

震災が起きる。建物が倒壊する轟音、爆発音の中、人々が逃げ惑う。サイレン、ヘリの音が響き渡る。炎の中、建物や柱の下敷きになった家族を助けられなかった事例が多々あり、生き残った者の心に、深い禍根を残したのだ」

音楽（厳かな音色） C I

（惟子、回想、神戸時代）

S E 人のうめき声。炎の音。爆発音等、被災地のパニック。

惟子の夫「ゆいこ、逃げろ。俺はもう動けない。おまえは逃げてくれ、逃げるんだ。俺はもうだめだ。行くんだ。火が回る。いろいろあったけど俺は、……し、あわせ、だった。ゆい、あ、りが、と、う。逃げてくれ、行け」

音楽（厳かな音色） C O

（間）

S E 教会の中の静寂。

続いてミサ曲（オルガン演奏曲）

N 「教会の中の一室。アルコール依存症の人のための集会がおこなわれていた。お酒を

止めたいと思っっている人であれば誰でも参加できた。集会はミーティングと言われ、まず誓いの言葉を交わし、アルコールやそれにまつわる人間関係に関する問題が各自、独白のように語られた。そこで語られたことは決して表に出ることはなかった。さまざまな人達が集まって、匿名でメンバーは語った。ミーティングの終わりには、小さなお祈りというのを唱和して、一日の無事を感じたのだった。そのメンバーの中に聡の姿もあった」

聡M 「僕は、女房してきた本当のことは言えないだろう。僕の心はさまざまな嘘を隠してきた。僕は愚かだ。失ってから気づくのだから。惟子さんの目の色と同じものだ」

音楽 F O（聡、回想、東北震災前）

聡M 「あの日、女房が津波にのまれ、行方知らずと聞いたとき、僕はあることを一瞬でわかったんだ」

S E 津波警報

聡M 「女房は逃げようとしなかったんだ。もう一人が耐えられなかったんだ。女房はあるとき死のうとしたんだ」

SE (聴、回想)。街の混乱の様子。

聴M「あの頃は何をやってもだめになった。僕は意気地なしだ。僕たちは別れて暮らしていた。女房はこう言った。あなたのいいようにしたらいいわ、と。酒を止める気がなかった。いい年をして母にも頼った。母は離婚を暗に勧めた。女房は家風に合わないからね。僕は酒を飲めればなんでもよかったです。僕は卑怯者だ。酔いが覚めたときの憂うつは半端じゃない。…僕が最後に女房を見たのは、離婚の事を決めようと思つて一年ぶりに帰った時だった。ちょうど、あの町の港祭りの日、花火大会の夜だった」

SE (聴、回想、仙台地方の港町)

花火の打ち上げ音が数回。

聴M「家に入ると女房はいなかった。いや、二階の窓辺に座っていたんだ。家具も置かない物置代わりの部屋だった。そこからだと港が一望できた。女房は最初僕が来たことに気づかなかった。どーん、どーん、花火の音がした。女房は窓から花火を見ていたんだ。無邪気な様子だった。ふと見ると、傍らに僕専用の椅子が置いてあった。まるで二人で花火を見るように。僕の椅子はそんなふうに置かれてた。台所の僕の座っていた椅子だ。今にも女房が話し出しそう

だった。あら、帰つてたの、女房が気づいた。振り返つた女房は、一瞬笑つたみたいだった。僕は…あんな寂しそうな人の顔…見たことがなかった」

音楽 FI

SE ミーティング、書類をたたむ音。

グループの一人「それでは最後に小さなお祈りをして終わります」

グループ全員「(唱和) 神様、私にお与え下さい。自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを、変えられるものは、変えていく勇気を、そして、二つのものを見分ける賢さを、ありがとうございます」

SE 部屋の開閉、グループの人たちが出て行く気配。

グループの人たち「(ロビーで声を掛け合う) じゃ来週な…あつ、おい、来月の花火大会、でかいぞ。牧師さん、張り紙してたな。おい、ミーティング休んで行ってみつか」  
グループの人たち「おつ、だめだめ、ビアガーデンもやってるぞ」  
グループの人たち「おつ、そうだったな。じや、またな、おつかれさん」  
グループの人たち「おつかれさん、まっすぐ帰れよ(おっ)」

SE 屋外、カラスの鳴き声。

聴M「僕は惟子さん、あの人が気になる。誕生日が来月か」

SE 喫茶店で再会。ドアベル(カランカラン) 惟子が入ってくる。

聴「小さく、やあ、という感じで惟子を迎えながら) よく来てくれましたね」

惟子「ええ、誘つて下さつてありがとうございます。オフィスでお会いできるかなって、でも今日でよかつた。早くにお会いできて」

SE ギター曲、グリーンスリーブスが流れる。

聴「メールありがとう。作詞を習い始めたって?」

惟子「通信講座よ。月々3、980円の。(笑い) 思いついたらメモすることにしてるんです。すぐ忘れるから。おかしいでしょう」

聴「聞きたいな」  
惟子「短いよ」

聴「山椒は小粒でもぴりりと辛い(笑い)」  
惟子「まっ、標語みたいだって、笑うわよ」  
聴「聞いてみないと、聞きたいな」  
惟子「まだ途中だし」

聰「途中ってことは、永遠のうただ」  
惟子「へんなのよ、まだ」

聰「前置きが長いね（笑い）」

SE 惟子、手帳を取り出す気配。

惟子「うん（軽く咳払いして、メモを読み上げる）じゃあ、ちよつと。読むわね。」

（間）

ギターをはじめたのよ

（間）

俺が死ぬ前に

聴かせておくれ

（間）

彼はもう

何も応えてくれなかった

彼の耳にも心にも

届きやしなかった

（間）

私は誰に奏でよう

あなたの声をどうか

もう一度私に聞かせてよ……」

聰「……いい詩だ」

SE 惟子がバックにメモをしまふ。

惟子「あなたにお願いがあるの。東名先生からも報告があると思うけど、家具を作つて欲

あるじ

しいの。主が安心して座れる椅子を作つ

て欲しいの。避難してきた人たちに。資金のことは労賃も含め検討中。たぶん大丈夫よ。私も音楽愛好家を集めて協力することになると思うわ」

聰「はい、わかりました。（頷きながら）」

音楽 グリーンスリーブス FO

SE

（一月後）ドーン、ドーン、花火が炸裂する。盛大な花火大会の様子。祭り会場のアナウンス。ただ今の花火は街角オフィスの提供でございます。ヒュー、ドーン。

惟子「きれい！（感嘆）」

聰「うん、すごいな」

惟子「夜通し、見てたいわ」

聰「うん」

SE 花火の炸裂音。人々の歓声。

聰「おめでとう」

惟子「？」

聰「誕生日」

惟子「あつ」

聰「カウントダウンって、この花火見るための、だろう？」

惟子「……ありがとう。なんだか私、……死に損なっちゃたわ（笑い）」

SE 花火の音と共に、夜空に歓声。

（了）